

## 慢性中耳炎の術例と非術例における 細菌学的検査結果の比較検討

伊 藤 正 博 ・ 武 井 修  
山 田 篤 伸 ・ 田 中 鴻 一 郎 \*

慢性中耳炎患者の耳漏検出菌の同定および感受性検査の5年間の統計をまとめたので報告する。対象は1968年～1972年までに九大耳鼻咽喉科を受診した慢性中耳炎患者590名、605耳から得た耳漏を培養したものである。感受性検査は中央検査室で行っている3濃度ディスク法により卅, 卅, +, -と判定した。感受性成績を通覧すると、MCI-PC, GM, CP, CER, CLなどが比較的好成績を示している。検出菌種の5年間の傾向をみると、緑膿菌・変形菌・ブドウ球菌が多数を占めている。また最近の変形菌・真菌の増加が目立つようである。術例と非術例の検出菌の感受性を比較すると、術例では感受性は明らかに低下している。その原因として考えられるのは、手術例では感染菌としてグラム陰性桿菌が多いことがあげられる。混合感染と単独感染の全体的な比をみると、両方とも50%対50%で頻度に差はなかつた。混合感染ではグラム陽性菌+グラム陰性桿菌の組み合わせが全症例の約1/3、混合感染の2/3を占め、最も多い。次いでグラム陰性桿菌による単独感染、グラム陽性菌による単独感染の順になつている。混合感染と単独感染を術例と非術例に分けてみると、前述と同様1:1で差はなかつた。またグラム陽性菌+グラム陰性桿菌による混合感染は術例、非術例とも30%以上の高率を示していた。その他、術例ではグラム陰性桿菌による単独感染がより高く、非術例ではグラム陽性菌による単独および混合感染がより高かつた。いずれにしろ混合感染の場合、約2/3以上がグラム陽性菌+グラム陰性桿菌である点を薬剤選択上考慮しなければならぬ。

結論：(1) 新しい抗生剤の出現のほかには、目立つた感受性の変化はみられなかつた。(2) 検出菌では変形菌・真菌のある程度の増加がみられ、また緑膿菌・黄色ブドウ球菌は高い検出率を示していた。(3) 術例ではグラム陰性桿菌の検出率の増加、各薬剤についての感受性の低下、そして高率のグラム陰性桿菌単独感

染がみられた。(4) グラム陰性桿菌とグラム陽性菌との混合感染が術例、非術例とも全混合感染の2/3以上を占め、これに対しては多剤併用療法の必要を感じた。

〔追加〕堀 克孝(東北大)：当教室の慢性中耳炎耳漏の細菌学的検査成績を追加する。最近は以前に比べブドウ球菌と緑膿菌の検出率が増加している。ブドウ球菌の感受性試験ではGM, MCI-PC, NB, CER, CEXがよく、緑膿菌ではCL, GMがかなりよく、次いでCB-PCで、その他はよくない。

〔追加〕山本 馨(阪市大)：慢性中耳炎では緑膿菌がよく問題になる。緑膿菌を血清型からみると218例のうち60%ぐらいがT5型に属するものが検出される。術前、術後共に緑膿菌が分離された症例が22例あつたが、そのうち18例に同じ血清型に属するものが分離され、その中でさらにT5が11例を占めた。そしてこのT5が術前、術後を通じて検出されたものに術後経過が悪いものが多かつた。すなわち同一種類の菌がずっと最初から組織内に定着している場合、術後の経過も不順であると考えてよいのではなからうかと思う。

〔質問〕杉山正夫(阪市大)：ブ菌・緑膿菌が多いという結果であるが、1人の患者から何回か検出されたことが頻度を高くしているのではないか。

〔応答〕伊藤正博(九大)：そのような症例もあつたが、非常に少数なので全体的な影響はないと思う。

〔質問〕杉田麟也(順大)：去年の会で東邦大桑原教授がPseudomonasに替つてMoraxellaが多くなつていと発表されましたが、その点如何。

〔応答〕伊藤正博(九大)：平均でみみるとやはり緑膿菌に比較して変形菌類が増加しているのではないかと思う。

\* 九州大学耳鼻科